

研究ノート

生涯学習研究における文化と余暇の再検討

—アマチュアによる表現活動の分析に向けて—

染葉ことの[†]

[†]東京大学大学院教育学研究科

本稿は、アマチュアによる表現活動の分析に向けて、文化と余暇の研究を整理したうえで、分析のための新たな理論的枠組みについて考察するものである。本稿では、文化についてはジョーンズによる「成人教育と文化の発展」論を、余暇についてはステピンスによる「シリアスレジャー」論に焦点を当てて理論の整理を行い、両論から示唆される理論的枠組みについて考察を行った。ジョーンズは相互作用による動的な文化の形成、ステピンスは相互作用による自己形成に主軸を置いていることを指摘し、両論に通底する相互作用を接合点に融合させた理論的枠組みを提示した。また、これを用いたアマチュアによる表現活動の分析について、たんなる実態分析にとどまらず、既存の枠にとらわれない文化と余暇の論を深めることに貢献する可能性を示した。

キーワード：余暇，文化，アマチュアによる表現活動

目次

1 はじめに

2 文化

- 2.1 文化研究の課題：実践を支える理論の充足
- 2.2 ジョーンズ「成人教育と文化の発展」論
- 2.3 知覚と言語：相互作用による動的な文化の形成

3 余暇

- 3.1 余暇研究の課題：「労働／余暇」の克服
- 3.2 ステピンス「シリアスレジャー」論
- 3.3 レジャーキャリア：相互作用による自己形成

4 考察

- 4.1 ジョーンズとステピンスの接合点：相互作用
- 4.2 アマチュアの表現活動の分析に向けて

5 おわりに

1 はじめに

本稿の目的は、大人がバレエを習う「大人バレエ」の分析の前段階として、文化と余暇の研究を整理したうえで、分析のための新たな理論的枠組みについて考察することである。本稿は、「大人バレエ」を念頭に置きつつも、広くアマチュアによる表現活動の分析に活かされることを視野に執筆されたものである。たとえば、アマチュアによるバンド活動、俳句、陶芸などの分析に役立てられることが期待される。

近年、「大人バレエ」の需要が高まっている。昭和音楽大学バレエ研究所が実施した「日本のバレエ教育に関する全国調査」によれば、2011年から2021年までの10年間で50代以上のバレエ教室在籍者は継続的に増加しており¹、バレエが50代以上の習い事として人気を高めていることは明らかである。バレエには日々のレッスンの先

に発表会があるが、佐藤生実がバレエの発表会を“夢をより体感できる装置”²と述べているように、表現の場があることがバレエ人気の下支えとなっているといえるだろう。バレエに限らず、発表会は広がりを見せているが、発表会がたんなるアマチュアの表現活動として軽視されてきた問題意識を端緒に、発表会文化を検討する研究が行われている³。

以上のような社会的・学術的動向から、「大人バレエ」をはじめとするアマチュアによる表現活動の分析への訴求が高まっているといえよう。その分析を行うための既存の理論的枠組みとして、社会教育・生涯学習領域において主要なものに、文化論と余暇論があるだろう。

文化はとらえどころのない抽象度の高い言葉であるが、「アマチュアの文化活動」と言ったときに想起されるのは、創作・表現、鑑賞活動であろう。創作・表現活動については、デジタル化が進み、誰もが創作・表現活動ができるようになった一方で、AIによって短時間で高水準の画像や音楽が生成できるようになった。クリエイティビティが人間だけのものではなくなった今、人間が時間をかけて創作・表現活動を行う意味を問いなおすことが求められている。また、鑑賞活動に関していえば、コロナ以降、Netflixなどの動画鑑賞やアナログレコードブームに代表される音楽鑑賞など、在宅での鑑賞活動が広く普及した。劇場文化においても、ロイヤルオペラハウスがライブストリーミングを開始するなど、他者と空間を共有しない舞台芸術鑑賞のあり方が確立された。このようなアナログからデジタルへ、公空間から私空間へという潮流は、文化を通じた公共性をいかにして生み出すことができるかについて我々に問いかけているが、後述するように文化についての理論はそれに答えられるほど十分に深められていない。

余暇については、後述するとおり、労働の対概念として認識されてきた。なお、本稿では労働を賃労働に限定し、賃金が発生しない家事労働などは含めない。今日、労働へのまなざしは変化しつつある。2019年度版「新入社員『働くことの意味』調査」において、「仕事はお金を稼ぐための手段であって面白いものではない」に肯定的な回

答をした者が42.3%と、2014年度と比較して9.6ポイント増加し、「あまり収入がよくななくても、やり甲斐のある仕事がしたい」に肯定的な回答をした者は、2014年度より14.9ポイント減少した48.0%であった⁴。労働は生きがいを得るためのものではなく、生計を立てる手段でしかなくなってきている。このような労働へのまなざしの変化とともに、余暇へのまなざしも変化している。「レジャー白書2023」速報版によれば、「仕事よりも余暇の中に生きがいを求める」の回答率が2020年以降増加している⁵。労働に生きがいを見いだせなくなった今日に生きる我々の人生において、余暇はもはや「余」った「暇」な活動ではなくなってきている。

これまで述べたような文化と余暇を取り巻く社会の変化により、文化と余暇の既存の理論をそのまま扱うのではなく、検討しなおし今日の文脈に引き継いで発展させていく必要があるだろう。本稿では、アマチュアによる表現活動の分析の前段階として、文化と余暇に関する注目すべき研究をレビューしたうえで、新たな理論的枠組みの提示を試みる。それは同時に、アマチュアによる表現活動をたんに「余暇」や「文化」と規定し、その枠を越えた意義を捨象してしまつてよいのかという問いに答えることになり、今日的な余暇・文化研究のあり方に示唆をもたらすだろう。

本稿の構成は次のとおりである。まず文化について、文化研究が抱える課題について確認したうえで、その課題に示唆を与える理論としてデヴィッド・J. ジョーンズによる「成人教育と文化の発展」論を検討する。次に、余暇についても余暇研究が抱える課題を確認し、それを克服する理論としてロバート・A. ステビンズによる「シリラスレジャー」論を検討する。最後に、ジョーンズとステビンズの論から見えてくる新たな理論的枠組みについて考察する。

2 文化

2.1 文化研究の課題:実践を支える理論の充足

文化研究の課題のひとつとして、実践を支える理論が不足していることが挙げられるだろう。

戦後、市民による文化活動の実践は豊かに展開されてきた。1950年代には、労音やうたごえ運動に代表されるように、職場・農村・地域・学校などでのサークルを基盤とした文化活動が活発に行われた。この文化活動がもつ性格として、草野滋之は“文化活動を通して、人間性を回復し仲間と連帯して生きていく、新しい人間像の追求がめざされていた”⁶ことと、“民衆自身が表現・創造活動の主体として位置づけられ、それを土台とする国民文化の創造がめざされていた”⁷ことを指摘する。1970年代、レジャー産業の隆盛によって余暇生活が個人消費的なものへと変化したことを背景に、職場を拠点とした文化サークル活動は停滞していくが、疎外された人間性を奪還しようとする地域文化運動は発展していった⁸。しかし市民による消費によらない文化活動が展開される一方で、大衆消費社会のなかで、文化が消費の対象として扱われる傾向が強まっていった。

以上の社会的実情に基づいて個人と社会における文化の意味と方向性を問う文化論を説いた論者として、張智恩が述べているように、佐藤一子と北田耕也が挙げられる⁹。佐藤は大衆消費型文化の拡がりへの問題意識から、地域における非営利的な文化活動に目を向け、「文化協同」や「文化的権利」について生活レベルの視点から説いた。特に「文化協同」については、草の根地域文化運動の実践に着目し、展開した理論として注目に値する。北田は大衆文化への対抗文化として「民衆文化」を説き、自己と『共』空間の形成の視点から文化の社会的機能について論じた。北田も実践に着目して論を深めており、たとえば、婦人たちが版画の絵本を作成した実践から、人間性をつくりだし守るものとしての文化活動の重要性を説いている¹⁰。

佐藤や北田による文化論は、実践から理論を展開し、その理論による文化活動への意味づけをもって実践を支えたものと評価できよう。今日、市民による文化活動が活発に展開される一方で、佐藤や北田の論のように、それを支え活性化するための理論的な深まりが十分にみられないのが現状である。この課題に示唆を与えうる論者として、新藤浩伸は文化活動の意義を論じる成人教育研究者のジョーンズを紹介した¹¹。次節において、

ジョーンズの「成人教育と文化の発展」論をレビューする。

2.2 ジョーンズ「成人教育と文化の発展」論

新藤が述べるように、ジョーンズの論の根幹には「誰が文化を定義するのか」という問いがあり、したがって成人教育の実践は参加者一人一人が文化を定義する営みとして位置づけられている¹²。また、ジョーンズは文化を“静的なものではなく動的なものであり、そのダイナミズムを促進するエンジンを見つけることができた場合にのみ生き残ることができるもの”¹³と捉えている。このような文化観に立つジョーンズは、これまで歴史的・社会的に規定されてきた文化や芸術を問いなおし、多様な文化を動的に発展させていく方途としての成人教育の役割を整理している。

ジョーンズはまず、文化を発展させるための成人教育の役割を分析するために芸術との関わりかたについて整理している。ジョーンズは、人々の芸術への関わりかたを鑑賞者、創作者、参加者の3つに区分した。鑑賞者とは芸術における audience であり、創作者はプロアマ問わず創造的な芸術家であり、参加者とは芸術において指揮をとる者や実演者のことである¹⁴。

そしてどの関わりかたにおいても、その文化芸術領域によって異なるが、4つの発達領域があるとした。それはすなわち、①知覚の鋭さの発達 ②表現の媒体を扱う能力の発達 ③創造的プロセスに関わる能力の発達 ④芸術活動の本質をみきわめる能力と、価値の相対性への意識の発達である。これらの発達領域は、学習の目標となるものではないが、成人教育の講師にはこれらの発達を理解したうえで学習者を支援することが求められる。

①知覚の鋭さの発達については、ジェームズ・J. ギブソンによって開発され、サミュエル・H. バートリーによって説明された6つの知覚システム、すなわち視覚、聴覚、味覚—嗅覚、触覚、基礎定位、恒常性に基づいて整理されている。この6つに加え、芸術表現の媒体としての言語への感受性を高めることの意義を示し、その方法を参加者と一緒に考えることが成人教育のチューターの役割だとしている。②表現の媒体を扱う能力の発達について、成人教育の講師は学習者を相互作用

的な学習へと誘う必要があるとしている。表現の媒体を扱う能力の相互作用的な学習とはどういうことかという、参加者一人一人が、自分が選んだ表現媒体との相互作用の自分なりのありかたを磨いていこうとすることである。③創造的プロセスに関わる能力の発達については、創造的プロセスには不安がつきものであるが、大人は学習の場に野心や地位、アイデンティティを持ち込んでしまうことで不安が失敗や恥に結びつきやすいことを指摘する。学習者に対して不安の感情があってもよいのだということを伝えることが、講師に求められる。④芸術活動の本質をみきわめる能力と、価値の相対性への意識の発達については、参加者に考えるべき内容を伝えないことや価値を学習者に押し付けないことが求められる。ある作品が芸術としての地位を獲得すること、それは社会的環境のなかで文化的に規定された価値体系のなかで、社会的なプロセスで価値づけられることであるが、本来、作品の価値を打ち立てるのは制作者以外の誰でもないことを留意する必要がある¹⁵。

ジョーンズの以上の理論は、芸術分野における成人教育プログラムの実践者を想定して書かれたものだが、芸術への関わりかたを精緻に整理した点において評価でき、それは幅広く市民による文化活動にも援用できるだろう。しかし、ジョーンズの4つの発達領域を理論的に用いた研究は見当たらず、ジョーンズの論を深めることは今後の課題として残されている。

2.3 知覚と言語:相互作用による動的な文化の形成

前節においてジョーンズの論を概観したが、その論を特徴づけるものとして、知覚と言語への着目があるだろう。

知覚については、ギブソンやバートリーの影響を大いに受けており、“ギブソンが述べるように現実世界で私たちは、多くの実験のように対象を静止したものとしては見てはおらず、固定された観点から見てもいけないのである”¹⁶と指摘したうえで、バートリーの定義を引用し、“知覚は「有機体と周囲の環境との即時的相互作用に対する呼称」である”¹⁷と述べている。つまり、ジョーンズ

は、動的な対象を相対的な観点から認識するときの即時的相互作用として知覚を捉えている。知覚は学習されるが、それは同時に文化によって規定されることを意味する。しかし、成人教育によって高められた知覚の意識は“知覚の文化的決定要因を超越し、それにより大人の学習者は、様々な文化的環境のなかで生み出されたものを楽しめるようになる”¹⁸という。動的な文化を志向するジョーンズは、動的な相互作用のなかで文化を見るための触媒として、知覚に可能性を見出しているのだろう。

言語については、前述のとおり知覚と同様に芸術表現において感受性を高めるべきものとして捉えられている。また、ジャック・メジローの変容的学習論について引用したうえで、成人教育のなかでのコミュニケーションの重要性も説いている。文化活動を行う大人のグループにおいて、コミュニケーションを通じてその文化の捉え方をグループ自体が問いなおしていくことについて、“その文化をどう理解したかを付け加えたり、その文化が採用している価値体系を広めていこうとするならば、かれらは文化の発展に参加している、といえるだろう”¹⁹としている。したがって、動的な文化の発展に寄与する相互作用としてコミュニケーションを、そしてコミュニケーションの媒体としての言語の重要性を見ているといえよう。

以上述べてきたように、動的な文化を形成するための相互作用として、知覚とコミュニケーションに着目したことが見て取れる。ジョーンズによる4つの発達領域の理論は、一見すると個人的な発達論と捉えられかねないものだが、実際はこのような知覚と言語の相互作用に裏打ちされた文化形成論であると捉えられる。ジョーンズの論をアマチュアによる表現活動へ活用し、実践的・理論的に深めていくことは、すなわち佐藤や北田の文化論を掘り下げることであり、そしてそれは文化の社会的意義に関する議論を活発化しうるだろう。

3 余暇

3.1 余暇研究の課題：「労働／余暇」の克服

これまで余暇は、「労働／余暇」の二分法に基づいた労働の対概念として、社会的・制度的・理論的に位置づけられてきた。歌川光一の整理によれば、今日「余暇」と括られる問題は、戦後～1960年代の「レクリエーション」から変遷していったものである。GHQ 占領下において「レクリエーション」の語が用いられるようになり、1950年代からそれは労務管理や生産効率のためのものとして職場で実施されるようになった²⁰。その後、1960年代の高度成長期には家計における余暇関連支出が増大し、1970年代以降の低成長の時代には週休二日制の定着などによって自由時間が増大した。このような余暇への関心の高まりから、1972年に、通商産業省産業政策局と経済企画庁企画官房にそれぞれ余暇開発室が置かれ、総合的な余暇行政が本格化することとなった²¹。それはすなわち、経済関連政策として余暇が扱われることを意味する。社会教育学においても、池谷美衣子が整理しているように、「労働と余暇」の枠組みに基づいて議論が展開された。たとえば、倉内史郎編『労働・余暇と教育—生活構造の変化は何を求めているのか』（1975年）、日本社会教育学会年報『生活構造の変化と社会教育』に収録された伊藤順康「国民の余暇生活の変容と社会教育の課題」（1984年）、日本社会教育学会年報『週休二日制・学校週五日制と社会教育』（1993年）がある²²。このように「労働／余暇」の枠組みのもと、社会的・制度的・理論的にも、余暇は扱われてきたのである。

これまで見てきたような「労働／余暇」の二分法を乗り越え、労働と余暇の両方を人生の一部と位置づけて検討しようとする研究の機運が高まっている。たとえば池谷は、“労働時間問題をはじめ今現実に日本社会で起きている問題を捉えるための枠組みとしては「労働と余暇」はあまりに巨視的で、結果として現状認識の精度を欠く”²³と、「労働／余暇」の限界性を指摘し、それを克服する理論としてワーク・ライフ・バランスの可能性を示唆した。2017年から2020年には、池谷を委員長とするプロジェクト研究「ワークライフ

バランス時代における社会教育」が、日本社会教育学会において行われた。プロジェクト研究では、検討する領域を拡張して、ワークライフバランスと近接するキャリアについても扱われた。児美川孝一郎によればキャリアとは、ワーク・キャリア（職業上の経歴）との関連におけるライフ・キャリア（生き方の履歴）である²⁴。今日のキャリア教育・支援がワーク・キャリアに偏重してしまっていることに対し、阿比留久美は“既存の社会を生き抜くためのライフハックとしては意味があるが、生きるとはどのようなものなのかを知り、味わいつつ充溢した生を生きていくことに資するものにはなかなかつながらないのではないか”²⁵と問題提起し、ライフ・キャリア教育・支援の重要性を説いた。このように生き方全体を問いなおす動きのなかで、池谷が指摘するように、これまで中心に置かれてきた労働の価値を相対化しうるものとして、余暇について議論を深めることが求められてきている²⁶。「労働／余暇」を克服するものとしての余暇への関心の高まりは、日本社会教育学会において2021年から始動して2023年現在進行中であるプロジェクト研究「社会教育学における余暇・レクリエーションの再検討」からも見てとれる。

「労働／余暇」を克服する余暇の視座として、労働と余暇に共通する価値を見出すものがある。倉内史郎は「労働／余暇」の二分法に依拠しながらも、両方に共通する価値として実利（世俗的成功）、まじめ（社会的価値）、あそび（私的自由）の3つを整理した²⁷。日本型雇用経営が確立されていく1970年代に同じ価値志向のあるものとして労働と余暇を捉えた点において、先駆的な考え方であったと評価できるだろう。しかしその後の社会教育の領域において、職業教育研究の衰退も相まってか、労働と余暇に共通する価値について議論が深められてこなかった。その一方で近年では、労働と余暇に共通する価値があることを指摘したステビンズによる「シリアスレジャー」の理論を輸入するかたちで、余暇の検討が積極的に進められている。

以上を踏まえたうえで、次に「シリアスレジャー」について検討する。

3.2 ステビンス「シリアスレジャー」論

シリアスレジャーは余暇社会学者のステビンスが提唱した余暇活動の概念であり、“アマチュア、趣味人、ボランティアによる活動で、彼・彼女らにとってたいへん重要でおもしろく、充足をもたらすものであるために、典型的な場合として、専門的な知識やスキル、経験と表現を中心にしたレジャーキャリアを歩み始めるもの”と定義されるものである²⁸。ここでいう「キャリア」とは、次節にて詳しく述べるようにアーヴィング・ゴフマンの「モラルキャリア」に基づく広義でのキャリアであり、決して職業的キャリアに限定されるものではない²⁹。「シリアス」という形容詞は熱意や誠実さを体現したものであり³⁰、したがって、日本語では余暇活動に本気で、真剣に、熱心に、まじめに、ひたむきに打ち込んでいる状態と説明できる³¹。シリアスレジャーには、忍耐、キャリア、個人的努力、持続的な利益、独自のエトス、アイデンティティの6つの特徴がある³²。

シリアスレジャー研究は主にレジャースタディーズの領域で展開されており、杉山昂平の整理によれば、それらの研究テーマは社会的世界の解明、制約への対処法略の解明、ジェンダー化の解明、マイノリティによる実践の解明、生活の質に対する効果の解明、シリアスレジャー的側面の照射、理論的精緻化、隣接概念との関連の検討の8個のカテゴリに分類できる³³。このうち理論的精緻化について、最新の動向をレビューする。

シリアスレジャーの理論的精緻化の動向としては、6つの特徴の精査と測定方法の開発などがある。イ・ジンヒョンらは、シリアスレジャーの6つの特徴のうち4つ—持続的利益、アイデンティティ、忍耐、努力—について、持続的利益がアイデンティティ、忍耐、努力に肯定的に影響を与え、またアイデンティティが忍耐と努力に肯定的に影響を与えるという相互関係があることを明らかにした³⁴。シリアスレジャーの測定方法として、ジェームズ・グールドらによって開発されたthe Serious Leisure Inventory and Measure (SLIM)がある³⁵。これは18因子の各因子につき3項目ずつ、計54項目からなるものであるが、グールドらはのちに、よりバイアスが少なく負荷量が高い項目を各因子から1つずつ選出した計18

項目を提示している³⁶。54項目のものはSLIMオリジナルバージョン、18項目のものはSLIMショートバージョンと通称され、これらを用いた研究が展開されている。SLIMを用いた研究34件のうち、13件はSLIMショートバージョンを、残りの21件はオリジナルバージョンを使用しており、SLIMは両バージョンとも信頼性の高い測定方法であることが認められている³⁷。以上に述べてきたような理論的精緻化の進展により、ゲーデニングからサーフィンまで、多種多様な余暇活動を対象とした実証的研究の拡大が加速している。

本節では、シリアスレジャー研究を概観するべく、ステビンスによる基本的概念を整理したうえで、シリアスレジャー研究の展開をレビューした。次節では、ステビンスの理論に立ち返り、レジャーキャリアについて深く検討する。

3.3 レジャーキャリア:相互作用による自己形成

前述のとおり、ステビンスはシリアスレジャーを、レジャーキャリアを歩み始めるものと定義し、そのキャリアが広義のものであることをゴフマンの「モラルキャリア」を引用して説明した。ここで注視したいのは、前述のライフ・キャリアとは異なる、今日のキャリア論とは異なる文脈でのキャリアが想定されていることである。ドナルド・E. スーパーがライフ・キャリア・レインボーを提示した³⁸のとほぼ同時期にステビンスがシリアスレジャーを提唱したために引用できなかったのだとしても、あえてゴフマンの「モラルキャリア」を示した意味を考える必要があるだろう。

ゴフマンは、モラルキャリアを“キャリアが本人の自己と、自分自身や他者を判断するためのイメージの枠組みのなかで生じる規則的な一連の段階”³⁹と定義している。モラルキャリアは、シンボリック相互作用論者が時間の経過とともに社会的に交渉されるアイデンティティの変遷のプロセスを説明するために用いる「キャリア」の一種であり、レットルなど社会的評価の対象となる個人の変容プロセスを説明する概念である⁴⁰。ゴフマンは精神病患者を対象に否定的なイメージの枠組みのなかで生じるモラルキャリアを分析

したが、これは肯定的なイメージにも援用可能な概念であるため、ステピンスはレジャーキャリアの説明にこれを引用したのだと推測できる。

ここで、シンボリック相互作用論の基本的な考え方についても整理したい。ハーバート・G. ブルーマーによれば、シンボリック相互作用論は3つの前提の上に成り立っている。3つの前提とは第一に人間はあらゆる事物に対して、その事物が自分にとってのもつ意味に基づいて行動すること、第二にその意味が仲間との社会的相互作用から生じること、第三にその意味は遭遇した事物に対処する際に用いられる解釈のプロセスのなかで修正されていくことである⁴¹。このようなシンボリック相互作用論の視点に立てば、個人も社会も互いに作用しながら変容していく動的なものであるといえる。

ステピンスがゴフマンのみならずブルーマーやアンセルム・L. ストラウスも参照していることから⁴²、「シリアスレジャー」論においてシンボリック相互作用論の影響が少なからずあることが窺える。シリアスレジャーの6つの特徴のうちアイデンティティが他の5つの着地点として説明され、一線を画していることから推察できるように⁴³、社会的相互作用のなかで自己を形成・変容していくものとして余暇活動を見ていることに、「シリアスレジャー」論の核心があろう。

しかしながら、6つの特徴を横並びにして表面的に余暇活動を見、自己形成の観点を差し置いて余暇活動そのもののシリアスさ／カジュアルさを評価するシリアスレジャー研究も少なくない。そのような研究を批判的に継承しつつ、ステピンスが示唆する相互作用による自己形成の視点に依拠しながら「シリアスレジャー」論を用いることで、労働／余暇の二分法を超克することが可能となり、ひいては余暇の公共性や教育的意義を捉えうるだろう。

4 考察

4.1 ジョーンズとステピンスの接合点:相互作用

本稿では文化と余暇の理論として、ジョーンズの「成人教育と文化の発展」論とステピンスの「シ

リアスレジャー」論に焦点を当ててそれぞれ検討した。

両者の論に共通していることは、相互作用に目を向けていることである。ステピンスは社会的相互作用のなかで自己が形成・変容されていくことに軸を置いている。また、ジョーンズはポストモダニズムの流れを受け取って文化を動的なものとして見ており、ステピンスは社会を動的なものとするシンボリック相互作用論の影響を受けている。このように、個人とそれを取り囲むあらゆる事物との相互作用のなかで、自己と周囲が互いに形成と変容を繰り返しながら動的な社会・動的な文化をつくりだしていくという観点において、両者の理論には通底するものがある。

しかし、相互作用のどちらに重心を置いているかについて、両者には差異がある。ジョーンズは相互作用によって形成される文化に主眼を置いている一方で、ステピンスは相互作用によって形成される自己に重心を置いている。個人とその周囲にある文化という着眼点の違いから、両者の理論を融合することで、互いに補完し強化するものとなりうる。

以上に述べたように、相互作用を接合点としてジョーンズとステピンスの論を融合する新たな理論的枠組みを用いることで、より包括的に相互作用の力学を捉えることができるだろう。

4.2 アマチュアの表現活動の分析に向けて

前節で述べたとおり、ジョーンズとステピンスの論を融合することで、アマチュアの表現活動を取り巻く相互作用を捉えることができよう。しかし、あらゆるアマチュアの表現活動の分析に活用できるまでの新たな理論的枠組みを確立するには、段階を経る必要がある。まず、実践の理論化のプロセスがあるだろう。ある実践について、ジョーンズとステピンスの論それぞれで分析を行い、その分析結果を融合して見えてくるものを探るのである。具体的には、実践者へのインタビューを「相互作用による文化の形成」と「相互作用による自己の形成」の2つのテーマから分析を行い、両テーマの分析結果から大きな相互作用モデルを生成するという作業が想定される。次に、生成した理論の比較検討である。たとえばまず、「大

人バレエ」の実践から理論化したとする。その後、陶芸の実践からも同様の手順で理論化を行い、比較する。このような比較検討を繰り返し、大きな相互作用モデルを構成する概念の統合をするという手順が想定される。以上の段階を経てブラッシュアップすることで、新たな理論的枠組みを確立できるだろう。

そのようにして確立された新たな理論的枠組みを用いてアマチュアの表現活動を分析することで、展望されることが2点ある。第一に、アマチュアの表現活動の社会的意義を見出せることである。これまで、アマチュアの表現活動は私事的で余剰なものとしてきた、つまり、それがもつ個人的意義に焦点が当てられてきた。しかし、たとえばアマチュア間の相互作用が明らかになることによって、アマチュアの表現活動の社会的意義にも光が照らされるだろう。そしてそれにより、アマチュアの表現活動がもつ公共性について論じることができるようになり、ゆくゆくはその支援の基盤整備のための議論へと展開できよう。第二に、余暇論・文化論の議論を活性化することである。動的な相互作用によってアマチュアが形成する文化を捉えることは、既存の静的な「余暇」や「文化」とは異なる余暇・文化観を提示することとなる。新たな視点の登場によって、これまでの論の批判検討が行われ、余暇と文化についての議論が活発になることが見込まれる。このように、ジョーンズとステピンスの論を融合して分析を行うことは、たんなるアマチュアの表現活動の実態分析にとどまるどころか、これまで蓄積されてきた余暇と文化の論を深め、理論の発展に貢献することに資するだろう。

5 おわりに

本稿では、文化の理論の不足という課題に示唆を与えうるジョーンズの「成人教育と文化の発展」論と、「労働／余暇」の二分法を克服しうるステピンスの「シリアスレジャー」論を検討したうえで、両者の論を、相互作用を接合点に融合させる新たな理論的枠組みを提示した。本稿の内容は、文化と余暇それぞれの領域で展開された両論に共通する相互作用の観点を示したことで、そして

それらを融合した論を提示したことに新規性と独自性がある。

以下に本稿の限界と課題について述べる。第一に、本稿ではあくまで国内における社会教育学のなかで展開あるいは紹介された研究のレビューにとどまっており、文化と余暇に関する先行研究を十分に検討できなかったことである。特にジョーンズの論に関連する研究のレビューができていないことが課題である。今後 Aesthetic Education をはじめとする文化芸術にかかわる領域の研究を幅広く見ていきたい。第二に、両者の理論の融合までは提示できたものの、実践可能なレベルまでの理論的枠組みを確立するには至らなかったことである。次稿、「大人バレエ」実践者を対象としたインタビューから分析を行う修士論文にて、実践の理論化を試みるが、それでもまだ道半ばである。理論的枠組みの確立は、今後長期的に取り組む課題として残しておきたい。

注

- 1 昭和音楽大学バレエ研究所 『「日本のバレエ教育に関する全国調査」報告書』 昭和音楽大学バレエ研究所, 2022, p. 23.
- 2 佐藤生実 “習い事産業と発表会” 〈宮入恭平編著『発表会文化論：アマチュアの表現活動を問う』 青弓社, 2015〉 p. 55.
- 3 宮入恭平 “はじめに” 〈宮入恭平編著『発表会文化論：アマチュアの表現活動を問う』 青弓社, 2015〉 p. 10.
- 4 公益財団法人日本生産性本部 “平成 31 年度「新入社員働くことの意識」調査結果” 入手先 URL : <https://www.jpc-net.jp/research/detail/002741.html> (アクセス日：2024-01-03)
- 5 公益財団法人日本生産性本部 “「レジャー白書 2023」(速報版)” 入手先 URL : <https://www.jpc-net.jp/research/detail/006494.html> (アクセス日：2023-10-31)
- 6 草野滋之 “戦後日本における民衆の文化活動・表現活動の展開とその意義” 〈畑潤, 草野滋之編『表現・文化活動の社会教育学：生活のなかで感性和知性を育む』 学文社, 2007〉 p. 207.

- ⁷ *loc. cit.*
- ⁸ *Ibid.* p. 210–211.
- ⁹ 張智恩 “成人の文化活動における形成の意味” 『生涯学習・社会教育学研究』 vol. 25, 2000, p. 51.
- ¹⁰ 北田耕也 『現代文化と社会教育』 青木書店, 1980, p. 106.
- ¹¹ 新藤浩伸 “1970年代以降のイギリス文化政策の改革をめぐる諸論：成人教育との関連を中心に” 『都留文科大学研究紀要』 vol. 80, 2014, p. 140–142.
- ¹² *Ibid.* p. 148.
- ¹³ Jones, David J. “Learning Culture,” *Adult Education Research Conference*, 2001, p. 5.
- ¹⁴ Jones, David J. 『成人教育と文化の発展』 [Adult Education and Cultural Development, 1988] 新藤浩伸監訳, 東洋館出版社, 2016, p. 59–109.
- ¹⁵ *Ibid.* p. 170–204.
- ¹⁶ *Ibid.* p. 66.
- ¹⁷ *loc. cit.*
- ¹⁸ *Ibid.* p. 179.
- ¹⁹ *Ibid.* p. 194.
- ²⁰ 歌川光一 “余暇（レジャー）と社会教育の関係を見直す：「シリアスレジャー」の再発見” 〈牧野篤編著 『社会教育新論：「学び」を再定位する』 ミネルヴァ書房, 2022〉 p. 189.
- ²¹ 米村恵子 “余暇政策の変遷：昭和から平成へ” 『情報と社会：江戸川大学紀要』 no. 19, 2009, p. 339.
- ²² 池谷美衣子 “社会教育学研究の視角としての「労働と余暇」の限界性克服に向けた一試論：ワーク・ライフ・バランスをめぐる議論を手がかりにして” 『教育学論集』 vol. 5, 2009, p. 103.
- ²³ *Ibid.* p. 116–117.
- ²⁴ 児美川孝一郎 『権利としてのキャリア教育』 明石書店, 2007, p. 73.
- ²⁵ 阿比留久美 “ライフ・キャリアを支えるキャリア支援と社会づくり” 〈日本社会教育学会編 『ワークライフバランス時代における社会教育』 東洋館出版社, 2021〉 p. 74.
- ²⁶ 池谷美衣子 “ワークライフバランスからみる社会教育の課題と展望：「誰もが働く社会」における労働と生活の再構築” 〈日本社会教育学会編 『ワークライフバランス時代における社会教育』 東洋館出版社, 2021〉 p. 16.
- ²⁷ 倉内史郎 “教育問題としての労働と余暇” 〈倉内史郎編著 『労働・余暇と教育：生活構造の変化は何を求めているか』 第一法規出版, 1975〉 p. 17.
- ²⁸ Stebbins, Robert A. *Serious Leisure: A Perspective for Our Time*. Transaction Publishers, 2015, p. xx.
- なお、和訳は下記を参照した。
- 杉山昂平 “本書の基本的な視点” 〈宮入恭平, 杉山昂平編 『「趣味に生きる」の文化論：シリアスレジャーから考える』 ナカニシヤ出版, 2021〉 p. xi.
- ²⁹ Stebbins, Robert A. *New Directions in the Theory and Research of Serious Leisure*. Edwin Mellen, 2001, p. 3.
- ³⁰ *Ibid.* p. 3–4.
- ³¹ 杉山昂平, *op. cit.*, p. xi.
- ³² Stebbins, Robert A. “Serious Leisure: A Conceptual Statement,” *The Pacific Sociological Review*, vol. 25, no. 2, 1982, p. 256–258.
- ³³ 杉山昂平 “レジャースタディーズにおけるシリアスレジャー研究の動向：日本での導入に向けて” 『余暇ソリズム学会誌』 no. 6, 2019, p. 75.
- ³⁴ Lee, Jin-Hyung., Lee, Sunwoo., Heo, Jinmoo., and Scott, David. “Deconstructing Serious Leisure Using Identity Theory,” *Journal of Leisure Research*, vol. 52, no. 5, 2021, p. 599–618.
- ³⁵ Gould, James., Moore, DeWayne., McGuire, Francis., and Stebbins, Robert A. “Development of the Serious Leisure Inventory and Measure,” *Journal of Leisure Research*, vol. 40, no. 1, 2008, p. 47–68.
- ³⁶ Gould, James., Moore, DeWayne., Karlin, Nancy J., Gaede, Diane B., Walker, Joseph., and Dotterweich, Andy R. “Measuring Serious Leisure in Chess: Model Confirmation and

Method Bias,” *Leisure Sciences*, vol. 33, no. 4, 2011, p. 332–340.

³⁷ Lee, KoFan., Gould, James., and Hsu, Hsien-Yuan. “Thickening Serious Leisure: A Review of Studies that Employed the Serious Leisure Inventory and Measure (SLIM) between 2008 and 2019,” *Leisure Studies*, vol. 42, no. 2, 2023, p. 296–313.

³⁸ Super, Donald E. “A Life-span, Life-space Approach to Career Development,” *Journal of Vocational Behavior*, vol. 16, no. 3, 1980, p. 282–298.

³⁹ Goffman, Erving. *Asylums: Essays on the Social Situation of Mental Patients and Other Inmates*. Penguin Books, 1968, p. 128–129.

⁴⁰ Scott, Susie. and Hardie-Bick, James. “*Moral Career*,” in Jacobsen, Michael Hviid., and Smith, Greg., eds. *The Routledge International Hand-book of Goffman Studies*, New York, Routledge, 2022, p. 74–84.

⁴¹ Blumer, Herbert. *Symbolic Interactionism: Perspective and Method*. Englewood Cliffs, 1969, p. 2.

⁴² Stebbins, Robert A., *op. cit.*, 1982, p. 255.

⁴³ Stebbins, Robert A., *op. cit.*, 2001, p. 7.

Reconsideration of culture and leisure in lifelong learning research : Towards the analysis of amateur expressive activities

Kotono SOMEHA†

†Graduate School of Education, the University of Tokyo

This paper aims to analyze amateur expressive activities by organizing studies on culture and leisure and contemplating a new theoretical framework for analysis. To organize these theories, it focuses on Jones' theory of "adult education and cultural development" regarding culture and Stebbins' "serious leisure" theory regarding leisure. By discussing the theoretical framework suggested by both theories, it points out that Stebbins emphasizes self-formation through interaction, while Jones emphasizes the dynamic formation of culture through interaction. The paper proposes a theoretical framework that merges the common theme of interaction found in both theories. Furthermore, it suggests that using this framework for analyzing amateur expressive activities could contribute to empirical analysis and deepen discussions on culture and leisure that are not confined to existing frameworks.

Keywords: Culture, Leisure, Amateur Expressive Activities